

Glocal Tenri



8

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.25 No.8 August 2024

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
見る・聴く・分かる
／井上 昭洋 1
- ・ 文脈で読む「身上さとし」(14)
明治 22 年 1 月～ 2 月
／深谷 耕治 2
- ・ 英語文献にみる天理教 (5)
D.C. グリーンの『Tenrikyo』(1)
／尾上 貴行 3
- ・ 音のちから—中国古代の人と音楽 (21)
出土楽器が語る音の世界—注目される
秦の音楽文化—
／中 純子 4
- ・ ヴァチカン便り (69)
法王 G 7 サミットに初参加
／山口 英雄 5
- ・ 天理参考館から (36)
猫と犬と馬と狐
／幡鎌 真理 6
- ・ 2024 年度公開教学講座要旨：『逸話篇』
に学ぶ (10)
第 1 講：172 「前生のさんげ」
／井上 昭洋 7
- ・ おやさと研究所ニュース 8

第 368 回研究報告会 (6 月 17 日)
／ 2024 年度公開教学講座のご案内

巻頭言

見る・聴く・分かる

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

4 月号から 7 月号にかけての巻頭言では、フィールドワークにおける参与観察とインタビューの事例をもとに、見ることについて、聴くことについて考えてみた。人は知識や経験が異なれば、同じものを見ていても同じようには見えていない。信者には 1 階建てに見える神殿が未信者には 2 階建ての建物に見えることもある。また、私たちは人の話を聴いて分かったつもりでいても、大事なことを聞き逃していることがある。録音したインタビューを文字起こしし、それを何度読んでも聞き逃していたことが、時をおいて突然見えてくることもあるのは、私の調査経験で紹介したとおりだ。

私たちに何が見えているのか？ 私たちには何が聞こえているのか？ 同じものを見ても、同じことを聴いても、同じように見えず、聞こえずということが往々にしてある。さらに、聴くことに関しては、話し手と聞き手の関係性も影響を及ぼす。ほぼ同じ知識や経験を持つ調査者であったとしても、その調査者が男性か女性か、外国人か同胞かによって、相手の態度も変わる。セクシャルな事柄についてのインタビューであれば、調査者がインフォーマントと同性か否かによってインフォーマントの回答の仕方も変わってくる。同胞の若い研究者には決して明かさなかった年配者だけが知っている村に伝わる秘儀も、外国人研究者相手であればたとえ若くてもオープンに話をする長老がいたりする。

見ることについて言えば、目に入ってくるものをありのままに認めること、聴くことについて言えば、耳に入ってくることをそのままに聞き止めることが大切になってくる。そこで必要とされるのは、対象を愚直に見つめ、また愚直に聞き入れる態度とも言える。それは対象に近接したまま細部に注意を払うようなアプローチの仕方である。この見たまま聴いたままの事柄から生まれる素朴な疑問が調査の起点となることが多い。

一方、対象から意識的に遠ざかって俯瞰することで見えてくるものもある。個々の細部の繋がりが突然姿を表すような形で見えてきて、なるほどと合点がいくような経験は誰しもあるはずだ。対象に近づいて舐め回すように見たり、一言一句に注意を払って逐語的に聴いたりすることでは分からなかったことが姿を現すこと。突然、視界が開けて、それまで見ていた物事が違って見えてきたり、それまでに聴いていたはずのことの中に隠れていた意味が突然聞こえてきたりすること。本当に分かるということは、そういうことかもしれない。

細かな部分について理解し、それらの関係性を理解した上で、全体として捉えようとする分かり方をホーリスティックな理解と呼んだりする。それはただ漠然と全体を眺めることではない。細部を了解したうえで全体として理解しようとする態度である。近づいて細かなことに注意を向けることと距離をおいて俯瞰して全体を眺めることを交互に行うような意識のあり方だ。この相対する 2 つの地点の間をオシレート（往復運動）しながら対象を分かろうとする態度は、主観的な参与と客観的な観察を同時に行おうとする参与観察のそれに相通じるものがある。それはまた、同時にネイティブ（信仰者）であり人類学者（宗教学者）であることを通じて、文化や信仰にアプローチしようとする態度を想起させる。

ところで、私たちは微視的に物事を捉えてしまい（抱えている問題にあまりにも近づきすぎて）煮詰まってしまうことがままある。そういう時に、神殿や教祖殿に参って、はたと気がつく経験をしたことはないだろうか。神意が向こう側から訪れてくるような経験だ。人によってはそれを「悟り」と呼ぶかも知れない。神殿や教祖殿は、細かなことに囚われがちな私たちにあらためて問題を俯瞰させてくれる場所でもある。